



沖ノ島から
文明を考える



小林 道憲

沖ノ島から文明を考える

二つのルート

『日本書紀』仲哀天皇二年の条に、次のような話がある。仲哀天皇は、氣長足姫（神功皇后）を皇后に立て、角鹿（敦賀）に行幸し、行宮として箭飯宮を建て、さらに紀伊国に御幸したが、このとき、熊襲が謀叛したので、熊襲征討のために、船で穴門（下関市豊浦町周辺）に向かった。一方、神功皇后は、角鹿を立ち、淳田門を通過して、穴門に至って、天皇と合流したと言われる。もちろん、この仲哀天皇と神功皇后にまつわる伝承は史実だとは言えない。しかし、五世紀ごろには、仲哀天皇がとったと思われる瀬戸内海ルートのほかに、神功皇后がとったと思われる日本海ルートが開けていたのである。

神功皇后は息長氏から出ている。息長氏は、琵琶湖東岸の坂田郡を本拠とし、琵琶湖から、敦賀、丹波（丹後）、但馬、筑紫などに海上権益をもった豪族であった。大和政権にとって、この日本海ルートを確保することは、大陸に至るシーレーンを確保するためにも、また、西国牽制のためにも必須のことであった。このルートを確保していた息長氏は、それを背景に、大和政権と深くかかわっていたのである。

これらの伝承や史実にもあるように、五世紀頃には、大和から玄界灘へ至る海上交通路として、二つのルートがあった。大和から難波に出て、瀬戸内海を通り、関門海峡を抜けて、玄界灘に出るコースは、以前からよく知られている。しかし、同時に、大和から淀川水系と琵琶湖を通過して、敦賀に至り、若狭、丹後、但馬、出雲を通

って、玄界灘に至るもう一つの航路が古代にはあったのである。

わが国の古代文明は、中国大陸や朝鮮半島からもたらされた新しい文物によって形成されてきた。このとき、日本海沿岸部は、大陸から新しい物や技術、人を受け入れる役割を果たし、各地域の発展に寄与した。大和政権にとっても、日本海沿岸部から、琵琶湖、淀川水系を通過して、畿内に至る〈日本海ルート〉は、その発展を支える生命線であった。

三世紀から六世紀にかけて、日本海沿岸部で、大和政権と比較的早くにつながりをもったと思われる地域は、敦賀から若狭、丹波、丹後、但馬に至る本州の日本海沿岸部と、北九州の玄界灘沿岸部の二つであったと思われる。これら二地域は、どれも日本海に面し、鉄素材をはじめ、大陸から常に新しい文物が流入してきていた地域であった。そして、この二つの地域が、大和政権と比較的早いうちにつながりをもったということは、大和政権が半島や大陸と交渉をもつために、その海上交通路の要衝として、この二地域をまず確保したということの意味する。特に、大和政権にとって、鉄素材の入手は死活問題であったから、この二地域は、大和政権にとって最重要地域だったのである。四方海に囲まれた日本列島にとって、シーレーンを確保することは、王権の成立にとって必須のことであった。

おそらく、大和政権が最も早くに開いたルートは、大和から瀬戸内海を通過して玄界灘に出、朝鮮半島に至る〈瀬戸内海ルート〉であっただろう。そのために、大和政権は、瀬戸内海諸国や北九州諸国との間に、経済的・政治的同盟を成立させていたと思われる。しかし、それよりも遅れてではあるが、大和から淀川水系を通過して琵琶湖に至り、敦賀や若狭に至るルート、さらに陸路で丹後に出るルートなど、朝鮮半島につながる〈日本海ルート〉も、大和政権にとって重要な海上交通路であった。このことは、神功皇后や応神天皇にまつわる神話や伝説が、筑紫と敦賀の二地域に多いことなどからも

押し量ることができる。

したがって、かなり早いうちから大和政権と密接な連絡を取り、そのことによって自分たちの支配権を維持していた地域は、越前南部や若狭、丹波や但馬、および筑前の玄界灘周辺部であったと思われる。そのうち、北部九州の北東部の諸国は、先進地域だったということもあって、四世紀の古墳前期には、大和勢力と密接なつながりを持ち、すでに同盟関係にあったと思われる。大和勢力は、早いうちから、瀬戸内海を通過して玄界灘に出、朝鮮半島南部に至る海上交易路を確保していたからである。しかし、同時に、また、この玄界灘は、〈日本海ルート〉との合流地点でもあったのである。

宗像氏の役割

そこで活躍したのは、玄界灘沿岸部を本拠地としていた宗像氏や阿曇氏や住吉氏など、海人族であった。このうち、宗像氏は、どちらかというと、大陸や半島との交易に従事していた外洋航海型の海人族だったと言われる。大和政権も、瀬戸内海から玄界灘に出て大陸や半島に至る海上交通路を確保する必要があったから、宗像氏を早くから勢力圏に置いていた。宗像氏は、筑紫から朝鮮半島諸国や中国大陸に出航する船や乗組員を管理統率する豪族だったのである。

宗像氏は、早くから大和政権と深く関与しながら、大和政権に必要な物資、技術、情報を、その交易力によって半島から調達していたと思われる。四・五世紀の盛大な沖ノ島祭祀も、宗像氏が大和政権のいわばエージェントとして執り行ったものと思われる。実際、玄界灘を東西に分断する神湊と大島との間の海峡は、宗像海人族の管理のもと、玄界灘を制圧することができたから、大和政権にとっても、宗像氏を勢力圏に置くことは不可欠なことだったのである。

海の航行に活躍していた海人たちは、常に航海の安全を祈願して出帆した。これら海人族の斎き祀る神々のうち、宗像氏の崇敬した

神々はよく知られている。玄界灘に浮かぶ孤島、沖ノ島の沖津宮にはタゴリヒメノカミが祀られ、宗像市大島の中津宮にはタギツヒメノカミが祀られ、宗像市田島の辺津宮にはイチキシマヒメノカミが祀られ、三神を総称して宗像三女神と言ひ、三社を総称して宗像大社と呼んでいる。

なかでも、沖ノ島の沖津宮は、大和政権と朝鮮半島との交流上、盛大な尊崇を集めた。沖ノ島は玄界灘に浮かぶ周囲四キロメートルの全島岩山の小島にすぎないが、この沖ノ島に四世紀から九世紀にかけてのおびただしい数の祭祀遺物が出土するのは、沖ノ島が朝鮮半島への航海の安全を祈願する国家的な祭祀の場であったことを物語っている。この小島が『古事記』『日本書紀』にも記載されているのは、そのことによる。宗像大社から宮地獄神社一帯の山麓地帯には、七、八十メートル規模の前方後円墳が多数存在しているが、これらは、沖ノ島の祭祀を司っていた宗像族の墓だったのであろう。

宗像三女神は、アマテラスとスサノヲの高天原での誓約の時に、アマテラスがスサノヲの剣を三段に折って生んだ女神ということになっている。これは、遠洋航海に従事していた海人族・宗像氏が、かなり早いうちに大和政権の勢力圏に入り、航海や軍事に奉仕するようになったことによる神話的調整であった。現に、宗像三女神は、『日本書紀』でも、天孫を助ける役割をもたされている。

海人集団を支配下に置き海上交通路を抑えることは、王権の維持と発展にとって最重要のことであった。海上交通路は、生活必需品にしても、威信財にしても、他地域からの重要物資の流入経路であり、この経路を握ることは、権力を握ることにつながった。特に、海上交易を通して輸入されてくる物資の集積と分配が行なわれる港、また、特産品を輸出品として積み出す港、つまり交易港を管理することは、それ自身、王権そのものを発生させるものであった。

朝鮮半島への道

宗像三女神の鎮座する田島、大島、沖ノ島の線を、北に延長すれば、金海伽耶に達する。伽耶ばかりでなく、新羅や百済の朝鮮半島南部は、列島と半島の交易の重要な拠点であった。この対馬海峡を横断する海上ルートは、東シナ海交流圏と日本海交流圏の接点に位置し、半島と列島の交易圏の交わる重要な海の回廊であり、いわば、文明の十字路であった。この回廊を通して、朝鮮半島から日本列島へ、鉄素材、騎馬技術、金銅製品、金製品、須恵器など、新しい文物が続々ともたらされ、人も渡来し、列島の古代文明を一変させていったのである。

弥生時代でも、奴国をはじめ北部九州に乱立していた諸都市国家は、それぞれ航海にすぐれた能力をもつ海人集団を抱え、盛んに朝鮮半島と交易を行ない、繁栄していた。この時代、北部九州の諸国は、朝貢という形をとって楽浪郡と盛んに交易していた。北部九州から朝鮮半島西岸を通過して楽浪郡に至る海上交易ルートが確立していたのである。

一支国や対馬国も、交易によって成り立った港市国家であった。『魏志倭人伝』でも、一支国や対馬国の人々は、船に乗って南北に市糴（交易）していたと言われている。一支国や対馬国は、南は北部九州、北は朝鮮半島南部や楽浪郡を結ぶ中継貿易の管理によって栄えていたのである。壱岐や対馬など、玄界灘の島々は、大和地方、瀬戸内海、日本海沿岸、北部九州、朝鮮半島、中国大陸を結ぶ重要な中継地であり、拠点であり、表玄関だったのである。沖ノ島は、これら玄界灘の島々を拠点に活躍した海人族たちの共同祭祀場であった可能性もある。

弥生時代以来、一支国や対馬国を介して、青銅器、鉄器、高級絹織物、綿などが輸入され、その見返りとしては、玉類、麻織物、木材、海産物、食糧、労働力などが輸出され、旺盛な交易が行なわれ

ていたのであろう。一支国や対馬国は、人の通行、物資の流通、情報の伝達にとって重要な拠点であった。その交流には、宗像族をはじめ北部九州の海人たちが活躍した。日本文明は、海外から新しい文物が流入することによって、常に新しく形成されてきたが、壱岐や対馬は、その海外からの新しい文物をまず最初に受け取った先進地域であった。中国という中心文明から発した文明の波が、朝鮮半島を通過して対馬や壱岐に至り、それが北部九州から畿内にもたらされ、周辺文明としての日本文明が形成された。

四世紀から五世紀にかけても、壱岐や対馬を通り朝鮮半島に赴いた倭人は、朝鮮半島の新しい文明世界に出合い、驚嘆したことであろう。乗馬の風習や、甲冑に身を固めた戦士、金銅製冠帽、須恵器、文字による記録など、文明社会のすべてが、倭人にとっては驚きであった。この新しい文明を、倭人は積極的に受け入れたのである。なかでも、朝鮮半島南部との交易によって獲得した鉄素材は、鍛造されて、農器具や漁撈具、土木工具や馬具などに加工され、列島の古代文明の飛躍的発展を可能にした。

しかし、交易は物の交換であるから、持ち込まれたものがあれば、必ず持ち出したものがある。列島から半島へもたらされたものの代表的なものは、翡翠や碧玉などの玉類であったと思われる。新羅の古墳から出土する王冠に飾られた翡翠の勾玉は、四世紀後半以後のものと言われる。この朝鮮半島出土の翡翠の勾玉は、交易を通して、日本列島からもたらされたものであろう。玉類の生産は、日本海沿岸部の特産品であるが、五世紀頃の古墳時代には、玉作りは大和や筑紫にも及び、大規模な生産がなされていた。

韓国南部の百濟時代の遺跡、全羅北道扶安の辺山半島の突端にある竹幕洞遺跡から、沖ノ島祭祀と酷似した祭祀遺物が数多く出土しているのは、おそらく、宗像海人族をはじめ、列島の海上交易従事者の居留地があったことによるであろう。この遺跡からは土製や滑

石製の祭祀遺物が出土しており、それらは、沖ノ島の祭祀遺跡から出土するものと同類である。おそらく、百済国内の素材を用いて、倭人が作った祭具であろう。特に、滑石製模造品の中の短甲形は、宗像大社の高宮祭場から出土しているものと全く同じである。ここでも、宗像海人族は、沖ノ島と同じような祭祀を行ない、航海の安全を祈りながら、さらに、高句麗や中国北朝へと向かったと思われる。竹幕洞遺跡は、大和から、玄界灘、朝鮮半島南部、朝鮮半島西海岸を通過して、大陸に向かう中継地だったのである。

草原の道へ

かくて、この海上交易ルートは、ユーラシアの草原の道やオアシス路（シルクロード）など、陸の交易ルートとつながる。海の道は陸の道に通じる。

なかでも、草原の道を通して遊牧民がユーラシア大陸の西から東へ運んだものは、青銅器や鉄器や馬などであった。例えば、紀元前一〇〇〇年頃から活躍した騎馬遊牧民のスキタイは、南ロシアの草原地帯にあって、早くから動物意匠を特徴とする独特の青銅器文化をつくりだしたが、このスキタイの青銅器文化は、草原の道を通じて匈奴に担われ、南モンゴリアに波及、中国の綏遠盆地を中心に起きたオルドス青銅器文化となった。このオルドス青銅器文化は、中国大陸の戦国時代から漢代の文化の影響を受けて、胡漢様式の青銅器文化を生み出した。中国大陸北東部に起きた遼寧式青銅器文化も、胡漢様式の青銅器文化であった。これらが、朝鮮半島に流入し、列島の海人たちの仲介を経て北部九州にもたらされ、紀元前六世紀以後の日本文明の弥生文化形成に大きな影響を与えたのである。日本列島では、青銅器は鉄器と同時に流入してきたために主に祭器に用いられたが、その源泉は、遼寧式青銅器文化やオルドス青銅器文化にあり、さらに、それは、南シベリアや南ロシアのスキタイ文化に

起源をもつことになる。

青銅器とほとんど同時期に列島に流入してきた鉄器も、日本文明に大きな変動をもたらしたが、これも、青銅器同様、草原の道の匈奴やスキタイに源泉をもっている。交易などを通して、草原の道由来の鉄器や鉄素材、鍛鉄技術や精錬技術が、戦国時代後期の華北の燕や朝鮮半島を通して入ってきたことは、農業生産の増大や社会の激変をもたらした。この鉄器の普及は、列島各地に小地域国家を成立させ、都市文明の原型をつくっていった。このような日本文明の激動をもたらしたのも、その源泉は、匈奴やスキタイが普及した製鉄技術にあり、それを運んだのも、主に対馬海峡を往来していた海人族であった。日本列島への鉄器文化の流入も、遠くユーラシア大陸の西部に源泉をもち、長い時間をかけた伝播の歴史を背景にしているのである。

さらに、中国大陸に大帝国を築き上げた漢は、紀元前一〇七年に朝鮮半島に楽浪郡をはじめ四郡を置いたが、朝鮮半島諸国はこの楽浪文化の影響も直接受けたから、紀元前後の日本列島は、朝鮮半島との交流によって、この文化の影響も受けた。紀元前後の日本列島は多くの都市国家に分かれていたが、それぞれの都市国家が朝鮮半島の楽浪郡などに朝貢することによって流入してきた青銅器や鉄器は、列島の文明を大きく変革した。ユーラシア大陸の騎馬遊牧民に源泉をもつ文明が日本列島に流入することによって、弥生時代の日本文明は大きく変動していったのである。

スキタイや匈奴がもたらした青銅器文化や鉄器文化は、海を隔てた日本文明にも巨大な影響を与えた。さらに、この青銅器や鉄器を中心とするスキタイ系文化の源泉が最終的には西南アジアにあるとすれば、古代の日本文明も遠くユーラシア大陸の西部に源泉をもつことになる。

四世紀末以後、日本の古墳から、鞍、鐙、轡などの馬具、帯鉤、

帯金具など乗馬用器具の出土が飛躍的に見られるが、これも遠く中央ユーラシアの騎馬文化に源泉がある。四世紀以後、馬及び騎馬技術が日本に到来したことは確実である。騎馬技術の到来は、日本文明に、交易圏の拡大や交通通信網の発達、戦闘形式の変化など、技術革新をもたらし、新文明の創造に寄与した。紀元前後から四世紀頃にかけて、ユーラシア東部の草原地帯で活躍していた匈奴や鮮卑などの騎馬遊牧民を通して、騎馬技術が朝鮮半島に伝わり、それが日本列島にもたらされたのである。古代の日本文明を一変させた馬文化は、中央ユーラシアの騎馬文化に源泉をもつ。

ユーラシア草原の騎馬遊牧民族は、草原の道のネットワークを通して騎馬技術を各方面に伝え、人類の文明史を大きく塗り変えていった。中国の戦国時代から漢時代にかけての騎馬技術も、朝鮮や日本の騎馬の風習も、北方草原の騎馬遊牧民に起源をもっている。草原の騎馬遊牧民が発明した騎馬技術は、運送の大量・高速化、行動範囲の拡大、戦術の機動化、交易と戦争の増大、社会の組織化など、東西ユーラシアの文明変動に大きな役割を果たした。

古代日本文明の形成も、遠く中央ユーラシアの草原の道に発する騎馬民族文化の衝撃波の影響を深く受けている。日本文明の変動に、ユーラシア大陸を東西に結ぶ広大な草原の道に生まれた騎馬遊牧文化の果たした役割は大きい。二世紀後半から六世紀にかけての中央ユーラシアの騎馬遊牧民族の移動は、ユーラシア西部の古代ローマ帝国の崩壊やユーラシア東部の漢帝国の崩壊なども招いたが、このユーラシア文明の大変動は、朝鮮半島や日本列島にも及び、日本文明の新しい形成を可能にしたのである。

スキタイが強力な騎馬遊牧国家を形成しえたのは、鎧を発明し、騎馬技術を向上させたからである。スキタイは、黄金や青銅製の武器、装身具や馬具、金銀の装飾のある器などにその贅を凝らした。スキタイ風の短剣・アキナケス剣やスキタイ風動物文様を施した黄

金製の美術工芸品などはよく知られている。スキタイは、これら古代ギリシアや古代オリエントから深く影響された文化を、草原の道の騎馬遊牧民の交易網を通して、ユーラシア東部に伝えたのである。

確かに、中国北部や朝鮮半島は、ユーラシアの草原の道から押し寄せてくる騎馬遊牧文化の深い影響を受けてきた。特に紀元前九世紀以後からの、青銅器、鉄器と製鉄技術、馬具と騎馬技術、金銀の装飾技術など、西部ユーラシア起源の新しい文物や技術を、草原の道の騎馬遊牧民は、北部中国や朝鮮半島にもたらし、その文明を一変させた。弥生時代から古墳時代にかけての日本の古代文明も、大陸や半島からもたらされた草原の道由来の騎馬遊牧文化によって大きく変動し、新しい形成の道を歩んだのである。

オアシス路へ

朝鮮半島や中国大陸につながる海上ルートは、また、オアシス路（シルクロード）とも接続していた。このオアシス路を行き交っていた商業民は、中国大陸へ西アジア起源の新しい文物をもたらした。ササン朝ペルシア系のガラス工芸品、金銀細工、楽器、青色顔料、文様、想像上の動物や鳥などである。これらが古代の朝鮮文明や日本文明に与えた影響も大きなものであった。現に、古墳時代の日本列島でも、ガラス製の勾玉や管玉や小玉が大量に出土している。このガラス製玉類の加工技術も、オアシス路起源の技術といわれる。また、このガラス製品に使われるコバルトブルーの青色顔料も、おそらくオアシス路起源のものであろう。金銀細工は、直接は朝鮮半島由来のものであるが、その技術も、もとをただせばオアシス路に至り着く。

六世紀後半から七世紀前半の飛鳥時代、さらに、その後の白鳳、天平時代も、いわばわが国の国際化時代であったが、その文化も、儒教や仏教や道教など中国に源泉をもつ文化ばかりでなく、遠く、

東ローマやササン朝ペルシア系の文化の影響を受けた国際性豊かな文化であった。これら東ローマやササン朝ペルシア系の文物は、オアシス路を通過して中国に伝来し、それが、わが国に直接または朝鮮半島を通して流入してきた。ササン朝ペルシア系の銀製器やガラス器、楽器などが奈良の正倉院に蔵されていることは、そのことを如実に物語っている。

だが、オアシス路を経て日本に流入してきた文明の最大のものは、仏教であった。インドに発した仏教は、北西インドや中央アジアでペルシア文化やギリシア文化を取り込みながら、大乘仏教を生み出し、オアシス路や中国、朝鮮半島を通過して、日本にもたらされた。仏教の伝来によって、日本文明は大きく飛躍した。

日本文明も、古来、ユーラシア大陸から押し寄せてくる諸文明の影響を深く受けてきた。なかでも、オアシス路に源流をもつ諸文明の影響は、今日の日本文明にも色濃く残っている。確かに、日本文明は、中国文明の強い磁場のもとに形成された周辺文明には違いない。しかし、その中国文明そのものが、オアシス路から流入してくる西方の諸文明の影響を強く受けてきたから、日本文明も西方からの文明伝播の波を大きく被ったのである。

四世紀から九世紀にかけて、ユーラシア大陸西部には、東ローマのビザンツ帝国、ササン朝ペルシアやアラブ・イスラム帝国、ユーラシア大陸東部には、魏晉南北朝から隋唐に至る帝国が出現し、これら東西文明がオアシス路を通過して交流した。この時代の中国文明にオアシス路を通過して流入してきた外来文化は、北西インド・中央アジア由来の大乘仏教文化、ササン朝ペルシアやアラブ・イスラムの西アジア文化、東ローマのビザンツ文化など、多様であった。これら外来の諸文化が中国的風土のもとで融合されて出来たものが、この時代の中国文明だったのである。この中国文明の影響を、飛鳥・白鳳・天平時代の日本文明は、直接または朝鮮半島を経由して

受けた。六世紀から八世紀にかけての日本文明の形成に、オアシス路の果たした役割は大きい。

東シナ海へ

日本列島の縄文時代から弥生時代にかけて、その文化の基底部に、北方系ばかりでなく、南方系の文化が濃厚に流入し、日本列島が長江中下流域や華南の文化と共通性をもっていることは、すでによく知られている。日本列島の西日本地域と長江流域や中国南部は、同じ照葉樹林文化圏に属し、文化を共有している。しかも、この湿潤中国の文化は船や水と深い関係にあり、そのような海人文化が、縄文以来、間断なく日本列島に流入していた。

陸稲や水稲の稲作文化もその一つである。長江と日本の深い関係を考えるには、東シナ海文明交流圏を前提しなければならない。水田稲作が波及してくるのは、朝鮮半島中南部や北部九州では、縄文晩期である。この朝鮮半島や日本列島に伝播してきた水田稲作のルートとしては、長江下流域から東シナ海を経て直接伝播してきたルートも考えねばならない。朝鮮半島や日本列島の水田稲作の起源は長江下流域にあり、長い時間をかけ、さまざまなルートを通して、直接人々が渡来し、水田耕作技術を伝えたものと思われる。縄文晩期に渡来した水稲稲作も、日本列島の文明構造を変化させ、弥生時代をもたらした。

この頃使われていたゴンドラ形をした準構造船は、中国の華南地方やベトナムなど、古代の呉越の水人社会で発達した船に起源をもつと言われる。この準構造船の登場により、弥生時代には、より多くの物資を積んで半島や大陸と交易することができるようになった。弥生時代も、半島や大陸と日本列島との間で、発達した海上交通を利用して、人、物、技術、知識、情報が、頻繁に飛び交っていたのである。日本列島は、弥生時代も、外来文明の流入による変革の時

代であった。次々に押し寄せてくる新しい物や技術や知識によって、人々の生活様式は変化し、社会も変動した。

古墳時代にも、東シナ海を介した大陸との交流はますます盛んになっていった。玄界灘沿岸部の海上交易者たちも、おそらく東シナ海を直接横断し、長江下流域、さらに、華南の沿岸部まで交易に出掛けていったと思われる。この時代には、いわゆる倭の五王が南北朝時代の南朝・宋に朝貢して冊封を受けている。また、残された記録をみるなら、応神天皇の時代の百済からの縫衣工女の来帰、中国の呉地方からの縫工女の獲得、雄略天皇の時代の呉国からの漢織・呉織の獲得など、大和地方での絹織物の新しい技術の開始を伝えるものが多い。この呉国への通交記事にある程度の史実があるとなれば、その東シナ海交通を担当していたのは、宗像氏など北部九州の海人族だったであろう。

日本列島の人々は、東シナ海を通して、華中や華南との交流も頻繁に行なっていたのである。四世紀から五世紀にかけては、製鉄、土木、土器製作、織物、造船などに関する新しい技術が大陸から流入し、それらが古代日本の文明創造に大きく寄与した。その際、東シナ海を介した日本と大陸の交流の果たした役割は大きかったと言わねばならない。

六世紀に入ると、日本列島には、主に百済から仏教が伝来し、飛鳥に法興寺が建てられるなど、仏教文化の隆盛が見られる。だが、この百済仏教が中国南朝の仏教の影響を深く受けていたことを考えれば、日本の初期仏教と中国南朝の仏教の密接な関係は無視できない。百済に仏教が入ってきたのは三八四年といわれるが、これは中国南部の東晋からであった。インド僧、摩羅難陀が東晋から来朝し、百済に仏教を伝えたのである。日本列島にも、六世紀には、百済から多くの僧や博士が渡来し、仏教ばかりでなく、儒教、易、暦法、医学など新知識がもたらされた。朝鮮文明も日本文明も、東シナ海

交流圏によって発展していったのである。

七世紀から九世紀にかけても、東シナ海を介した交流は盛んに行なわれた。なかでも、遣隋使や遣唐使の派遣は、日本文明の形成に大きな役割を果たした。遣隋使や遣唐使には留学生や学問僧が参加、隋や唐の新しい文化の摂取に努め、帰国後、これを普及した。彼らが隋や唐の国際色豊かな文化から学んだものは、政治制度、学問、思想、宗教、芸術、あらゆる面に及んだ。特に、奈良、平安時代の文化は、遣唐使がもたらした唐文化によって彩られた。遣隋使や遣唐使の留学生や留学僧、外交使節や商人などは、東シナ海を経由して、隋唐の新しい文物をもたらし、そのことによって、日本文明を新しく形成していったのである。この交流に果たした航海者の働きは重要である。

沖ノ島の出土品から

実際、沖ノ島祭祀遺跡からの膨大な出土品の中にも、これら草原の道、オアシス路、東シナ海経由と思われる遺物は数多くある。有名になった黄金製指輪は、韓国新羅由来のものといわれる。その作風は、慶州にある普門里夫婦塚出土の金製太環式耳環の主環、および韓国国立博物館所蔵の金製腕輪にある細金の円環や古新羅時代の金製指輪に酷似している。しかも、この新羅の細金の細工技術は、漢の楽浪時代の純金製帯金鉤のうちに見られる。漢の楽浪文化が、古新羅を通して、沖ノ島に渡来していたのである。

また、沖ノ島出土の珍しい金銅製竜頭も朝鮮半島南部経由といわれ、朝鮮半島南部との盛んな交易の有様を伝えている。現に、韓国慶州の新羅時代の金冠塚や金鈴塚からも同じものが出土している。その源泉は、北魏時代の龍頭にあるといわれる。

わが国の馬具の出土は中期古墳時代以後激増してくるが、沖ノ島でも、六世紀後半の岩陰祭祀の時代になると、金銅製馬具の出土が

多くなる。金銅製の鞍金具、雲珠、杏葉、轡、帯先金具、辻金具などである。沖ノ島出土の金銅製馬具類の細工は見事なもので、透かし彫りの下に玉虫の羽や雲母板を嵌め込み鋳で止めるという手の込んだ手法を使っている。こうした馬具は、韓国伽耶地域の五世紀代の古墳から出土しており、伽耶との深い関係が予想される。また、金銅製歩揺付雲珠も、伽耶や百済の副葬品として出土しており、沖ノ島との関係が深い。一般に、沖ノ島出土の金銅製馬具は、百済、伽耶、新羅系のものと思われる。だが、その起源が、草原の道の騎馬遊牧民にあることは確かである。

さらに、沖ノ島出土の浮出切子装飾瑠璃碗破片（二片）は、正倉院御物や伝安閑天皇陵出土のカットグラス製碗と同類のものと考えられる。このようなカットグラス製碗は、中国寧夏回族自治区固原県李賢墓出土の切子碗と共通しており、さらに、イランのギラーン出土のササン朝ペルシア系カットグラス製碗と酷似している。紀元前後から六・七世紀にかけて、イラン高原では、種々のカット技法が編み出されていた。沖ノ島出土のカットグラス製碗破片も、朝鮮半島を通過して長安からペルシアに至るオアシス路（シルクロード）起源のものなのである。沖ノ島出土の金銅製馬具などに見える唐草文様や有翼人を絡ませた隠し文様も、明らかにオリエント起源であり、これも、オアシス路を通過してもたらされたものである。沖ノ島は、イランを發し、オアシス路（シルクロード）を通り、長安を経て、朝鮮半島から大和に至る道の結節点を形成していたことになる。

また、沖ノ島から大量に出土している鏡類の一部は、中国大陸由来のものであり、東シナ海海上ルートを通過してもたらされたものであろう。実際、沖ノ島出土の鏡のなかで舶載鏡と考えられるものは、一八号遺跡出土の方格規矩四神鏡、三角縁神獸鏡、二一号遺跡の獸帯鏡（二面）、八乳獸帯鏡（三面）、八号遺跡の盤龍鏡（六面）など、かなりの数にのぼる。

さらに、沖ノ島から出土している唐三彩の断片も中国大陸由来のものと考えられ、東シナ海の海上の道が予想される。唐三彩は、盛唐の頃の洛陽や長安の郊外にある貴族の墳墓から出土しており、中国大陸以外からの出土例は珍しい。沖ノ島出土の唐三彩は七世紀後半のものと思われ、おそらく、大和政権によって沖ノ島に奉納されたものであろう。

また、沖ノ島出土の、勾玉、管玉、碧玉製管玉、ガラス製切子玉、ガラス製小玉、水晶製三輪玉、真珠玉、水晶製勾玉、瑪瑙玉、滑石製や碧玉製の釧、金銀銅製の釧などは、むしろ、日本列島から朝鮮半島へもたらされた輸出品の一部が奉納されたものであろう。翡翠をはじめ水晶で作った勾玉や切子玉は、日本海沿岸を中心に弥生時代から古墳時代にかけて製作されているが、それらは、また、朝鮮半島の新羅、伽耶、高句麗からも出土している。したがって、これら朝鮮半島出土の玉類は、交易を通して日本列島からもたらされたものであろう。日本列島からもたらされた玉類が、朝鮮半島産の鉄や金と交易されていたのであろう。

草原の道やオアシス路や東シナ海経由の文物が、朝鮮半島南部を通過して、あるいは直接北部九州にもたらされ、列島各地に運ばれるとともに、日本列島からも、また、この海上の文明の十字路を通過して、さまざまなものがもたらされたのである。

沖ノ島のなかの世界文明

文明は、他の文明との接触によって、自己自身を形成していく。文明間の交流や接触を通して、一つの文明から他の文明へ、新しい文物や情報が伝播して、それが文明を大きく塗り替えていく。日本文明も、絶えず外から新しい文物や思想を受け入れることによって、自己発展してきたのである。しかも、日本列島の文明は、交通路としての海を通して、草原の道とも、シルクロードとも、中国大陸と

も結びつき、ユーラシアの諸文明と深く結合されていた。

特に、北部九州は、対馬海峡を介して対岸の朝鮮半島や大陸と直結していたから、そこを通してユーラシア大陸の諸文明が盛んに流入してきていた。そのことによって、古代の日本文明は絶えず変革され、脱皮を繰り返していた。この大陸や半島との交流があって、はじめて日本文明の形成はありえた。古代でも、対馬海峡を通して、半島や大陸から多くの渡来人が来航し、外交使節も訪れ、常に大陸や半島の新しい技術や情報がもたらされていたのである。

日本文明の形成過程を考える上で、海を介して流入してきた新しい物や技術、宗教や制度、情報や知識が大きく寄与してきたということは否定できない。この場合、それらの移入に携わった海洋民の果たした働きは偉大である。海を障害とは考えなかった航海民たちは、その交易活動などによって、文明と文明を結びつける媒介の役割を果たした。彼らの媒介によって、物や情報が移動し、その交流から、新しい社会秩序も形成されていったのである。彼らは、文明の境界を越えて移動し、文明の相互浸透を可能にしてきた。特に、日本列島は四方海に囲まれていたから、航海民なくして、新しい文物の受容はできなかった。宗像氏など航海民が、古代日本文明形成に果たした文明論的役割もこの辺にある。彼らは、大陸や半島に赴き、交易に携わりながら新しい文物を運び、日本文明を常に変動させる働きをしてきたのである。

これら海人集団の働きによって 日本文明には、朝鮮半島、中国、インド、ペルシア、オリエント、地中海など、世界各地の文化が流入してきた。日本文明の中に、世界文明が宿っている。日本文明も、ユーラシアの諸文明の影響を深く受け、その遺産を保存しながら、独自の文明を形成してきたのである。日本文明にも、草原の道の騎馬遊牧民や、オアシス路の商業民、南シナ海や東シナ海を航海していた海洋民が運んだ世界各地の文化が流入してきている。だからこ

そ、日本古代の文明形成は、ユーラシア大陸の諸文明の変動と深く連動しているのである。

沖ノ島も、ユーラシアの巨大な文明ネットワークの一つの結節点であり、そこには、世界中の文明要素が集約され、結晶化している。沖ノ島は、四世紀から九世紀に至る世界中の文明の一つの集約点であり、焦点である。沖ノ島の中に、世界文明が宿っているのである。

「一滴の露の中にも全宇宙が宿る」という世界観は、西アジアまたは南アジアを起源として、東西に広がり、わが国にも受け入れられ、茶道や華道の源泉にさえなっているが、同じことは文明についても言える。沖ノ島という地球全体から見れば一滴の露にも等しい小島のなかに、世界中の文明が宿っているのである。

註

- 1 「仲哀紀」二年
- 2 「神代紀」上 第六段
- 3 『魏志東夷伝』弁辰の条
- 4 「応神紀」十四年、三七年 「雄略紀」十四年

参考文献

- 倉野憲司・武田祐吉校注 『古事記・祝詞』 日本古典文学大系 岩波書店
一九八三年
- 武田祐吉訳注 『新訂・古事記』 (角川文庫) 角川書店 一九八三年
- 坂本太郎ほか校注 『日本書紀』 上下 日本古典文学大系 岩波書店 一九八六年 一九八五年
- 井上光貞監訳 『日本書紀』 上下 中央公論社 一九八七年
- 班固 『漢書』 3 (漢書地理志) (ちくま学芸文庫) 筑摩書房 一九九八年
- 井上秀雄ほか訳注 『東アジア民族史』 1・2 (魏志東夷伝など) (東洋文庫) 平凡社 一九七四年

- 武藤正行 『海の正倉院 沖ノ島』 世界日報社 一九九三年
- 弓場紀知 『古代祭祀とシルクロードの終着地 沖ノ島』 新泉社 二〇〇五年
- 小林道憲 『古代日本海文明交流圏』 世界思想社 二〇〇六年
- 小林道憲 『文明の交流史観』 ミネルヴァ書房 二〇〇六年

（『比較文明研究』第十二号 麗澤大学比較文明研究センター 二〇〇七年所収）